はじめに

過去の写真を見ていると、そこに写っている人は今はもういない、ということに気づく。子どもの自分も、かつての友人や隣人も、亡くなった家族にしても今はここにいない。それなのに写っている人たちはこちらを見ている。現在を見ている亡き人たち。生きている私たちもそれに応えてまなざしを返す。その一瞬の時間を擦り込むことによって、亡き人たちとの対話ができないか？
そこから写真をドローイングに起こすことが始まった。

それにしてもなぜ写真をもとにわざわざドローイング（絵）を描くのか？そこには時間が関係している。写真のもつ一瞬の時間は、ドローイング（絵）によって引き延ばされ、一種の時間の歪みのようなものを生じさせる。歪みとは私がここに生きていることの別の証明でもある。そこからかつての一瞬と今との距離を測ることができるかもしれない。その距離とは、今度は私が亡き者として未来の誰かにまなざしを向け、交信するその時間の距離でもある。

奄美の人たちを訪ねて行く旅が始まった。人から人を紹介してもらい、ときには、紹介者の人と一緒に、いきなり居間にお邪魔して家族の写真を見せてもらうこともあった。奄美の人たちはそんなぶしつけなお願いにも、ほとんど奇跡的とも思えるかたちで快く応えてくれ、私的なことも話してくれた。依頼に訪れたときの会話の数々、それ自体がこの企画にあげた「対話」でもあった。

文章は600字を目安とし、「私が生まれたとき…」で始まることをお願いしたが、必ずしもそこにこだわらなかった。また写真は直接見せてもらったものもあるが、多くは文章と一緒に数点が送られてきた。

この企画は2016年の夏に始まり、私は送られてきた写真を選んでホテルでドローイングにとりかかった。その後間断なく文章と写真が届き、多くのやり取りとともに、全体が出来上がったのは2017年の3月になった。粘り強くこの企画に参加してくださった奄美の人々に深く感謝するとともに、コラボレーションできた喜びを共有したい。

—— 長沢 秀之 ながさわ ひでゆき

対話

「私が生まれたとき」奄美編

～兄と妹の話～

私が生まれたとき…

「生まれてくるまで、ぼくはひとり真っ暗な母のおなかの中にいた。
何も見えなかった。ぼくは不安な思いだった。“ここはどこ？”とぼくは言った。」

「“せまい、せまい、わたしを早く出して！”とわたしは言った。」

「ぼくは暗闇の中、不安の中でもがいて母のおなかを何度も内側から蹴っていた。
その振動をぼくは足で感じて少し安心した。」

「わたしは浮いていたのかもしれない。せまいところはひとつの宇宙で、わたしはひとつのいのち。
ドクンッ、ドクンッと、なにかからだに響く音のようなものに包まれていた。」

「ぼくは母のおなかから外の世界に出た瞬間、光のようなものに包まれた。
そして呼吸をした。大声で泣いた。呼吸も泣くのも一緒だった。
からだの中に新鮮な空気がどっと入ってきて、ぼくは嬉しくなって、もっと泣いた。」

「はかることのできないひろいところから、もっとせまいところを通ってわたしは生まれた。
そのとき、わたしはまだなにも見えなかったけれど、動いている光のようなものを感じた。
まわりがものすごく光っていた。」

妹が生まれたとき、ぼくは白い歯を見せながらその顔を覗き込んだ。
妹はそれを見てちょっと笑ったような顔をした。妹の世界から見たら、
ぼくは別の生きものなのだろう。ぼくも妹も同じところにいたようだ。
同じところにいて、宇宙遊泳のように浮かんでいたら、あるとき突然
ジェットコースターに乗ってトンネルを抜けてここに生まれた。同じ体
験だ。もう少し経ったら、妹もほんとうにぼくを見て笑うことができる
ようになる。ぼくも笑いを返す。そうしてぼくはいろいろなひとと出会う。
もうひとりではない。

松野 伊吹 まつの いぶき
2001年生まれ、大島高校一年生
松野 和未 まつの なごみ
2003年生まれ、金久中学校二年生
図は、松野さん提供の伊吹くん誕生の写真と想像から

＋母の話＋

二人には生まれてすぐに
心臓の疾患で亡くなった姉がいた。
出産後すぐ鹿児島、福岡と
転院したけれどだめだった。
その後、この兄妹を産み育てた。

二人のお産のときはとても大事に出産に挑んだ。
二人目の兄は反対を押し切って自然分娩。
難産だった。
三人目の妹は大丈夫と言われたけれど、
帝王切開してもらった。
訳もなく自分の思いを通したお産だった。

思い返すと、亡くなった長女から、
そうしなさいと導かれたような気がする。
おかげで、健康な子どもたちに
育ったのかもしれない。
生きていたら長女は今高校二年生。
実は二人は三人兄弟なんです。

—— 松野 恵子 まつの けいこ、NPO法人職員

私が生まれたとき、あたりは暗闇と静寂に包まれていた。

暗闇はその後ずっと、私が死ぬまで続いた。私は暗闇以外の世界を知らないから、
見えるということがどういうことか分からない。
私には世界は全部地続きにつながっていて、
ひとつの生命のように絶えずかたちを変えながらそこにあるように思える。

私が川のはしに立って、足元の石を拾って放り投げると、チャポンという音がする。
私には、手も、触れる石も、石が飛ぶ空気も、川の水も皆ひと続き。
わずかな振動の違いが、そうした続きのなかの違いを教えてくれる。

振動の世界ではものがそこにあるというよりは、
すべてがひとつながりのなかにあるという感じだ。だから神様も同じで、
それはものじゃないから、つながりのなかにいつも現れるんじゃ。
死んだ人も同じ。少し、ほんの少しの振動でその人が現れる。
それは見るもんじゃないからや。

見るというのは、なにか切り取ったものを見るということなのかね？
つながりのものを切り取らないと見ることはできないのかね？めんどうくさいね。
世界を見るには無数の切り取りが必要なんじゃね。
それじゃあやっぱり機械が必要だねえ。いっくら目があったって足りやしないよ。

H.N.

図は、越間 誠　奄美写真集『奄美　二十世紀の記録』（2000年）からの引用による
詳細は08ページを参照

越間 誠《ハジキの老婆》 奄美写真集『奄美　二十世紀の記録』より

かつて南島―奄美、沖縄のおんなたちは両手の甲にハジキ（入れ墨）をする習俗があった。いま途絶えて久しいが、明治の頃まで島の女の成女儀礼として、結婚の証とも言われた。

初めて形の整ったきれいなハジキに出会ったのは、1969年10月。フクギ並木の美しい大和村の集落。旧家の面影を残す、表の畳の間に高齢の老婆がひとり座り込んでいた。戸や窓はすべて開け放され、縁側の板間には芭蕉着がふたつ、天井から吊るされ風にゆらいでいた。老婆は視力を失っており、目を閉じた全神経を訪れた数人の来訪者に向けその気配をさぐっていた。色白で骨格のしっかりした大柄な女性で、来訪者の呼びかけにも穏やかにしっかりと受け答えしていた。

この日集落では古来の年中行事「浜願」が行われていた。主婦が主役で各家庭の慣わしに従い浜辺や庭先、神社で行われる。線香を灯し、料理を供え、東の空に向かって一家の繁栄と家族の健康を祈る。この1年の感謝とこれからの無病息災を祈願するのである。

ハジキの老女は風にのって浜辺から漏れ来る村人のざわめきを遠くにききながら、いにしえの想念に浸っているかのようであった。

―― 越間 誠

図（部分）は、越間 誠　奄美写真集『奄美　二十世紀の記録』（2000年）からの引用による。写真に添えられた越間氏のコメントは以下のとおり
「ハジキの老婆　視力を失った老婆の手には、島の女のしきたり、ハジキが残されていた。（大和村国直／1969.10）」
また別のページに以下の説明もある
「ハジキ（かつて島の女たちは結婚の証として手にハジキ（入れ墨）をしていた）」

私が産まれたとき、
祖父母も、まだ小中学生だった叔父叔母も
一緒にいた矢之脇町の小さな家。
清潔好きな祖父。美人の祖母。
粗末な家だったけれど、
記憶の中では真っ白できれいな空間。

祖父母が共同事業の負債を引き受けて、破産したのが私の生まれる5年前。「武士は食わねど高楊枝」が祖母の口ぐせ。お陰で我が家が貧しいという自覚なく育ってしまった私。

母方の実家は小宿町。縁側から見る秋の満月は大きく美しかった。紬の機械機（きかいばた）の工場（こうば）があり、祖母が大きな鍋でサツマイモを蒸し、祖父が薪を割って五右衛門風呂を沸かしてくれる。まだ占領下だった沖縄から、ときどき帰省する伯母のお土産はハーシーズのチョコレート。
弟やいとこと近くの浜で遊ぶ。広い遠浅の砂浜で、祖母が御先祖に祈りを捧げる浜下（はまお）れ行事。

昭和の終わり頃、この砂浜は大きな住宅地に変わった。

―― 次ページに続く…

生後2カ月の夏の日、ハンモックにゆられて昼寝する赤ちゃんの私。突然の轟音に驚いて私を抱き上げた母。柱が母の上に倒れてしまう。火の中で気を失った母。祖母が助けに入り、赤ちゃんの私を見つけて連れ出す。「嫁がまだ中にいるんです」と叫ぶ。消防士も入れなかった火の中へ飛び込んで母を助け出した方がいた。「天国への花畑の上を飛んだのよ。お花畑は本当にあるのよ」と、母の臨死体験。

昭和37年、瀕死の患者に輸血用血液を届けた自衛隊機が大字金久（おおあざかねく）の蘭館山に墜落炎上。この事故で住民1名と自衛隊乗員12名全員が亡くなり、蘭館山には慰霊碑が建立された。

大戦がすっかり過去のことと語られていた昭和37年は、実はまだ戦後17年だった。高度経済成長期、奄振予算で整備が進む名瀬、バブル前夜の東京、平成初期の頃まで奄美の繁華街は賑やかだった…。

さて、バブル崩壊後、結婚して子どもを授かった私は、長男を抱きながら自分が抱かれていた頃を思い出す。粗末な家だったのに、なぜか真っ白できれいだった空間を。

上堀内 ちあき かみほりうち ちあき

1962年生まれ　会社役員・NPO法人理事

図は本人提供の「従兄、従姉、その母と私」、「テルを担ぐ祖母（前ページ）」の写真から

私はアマミノクロウサギ。
私が生まれたとき、人間の世界では、
この島を含む大きな戦争が終わったときでした。

私はこのダンヤクコの近くの山の中で生まれました。ダンヤクコというのは弾薬庫のこと、日本の南西諸島や南方防衛のための陸軍、海軍、空軍の弾薬を貯蔵していた倉庫のことです。終戦の武装解除のとき、ここから大量の弾薬が運び出され大島海峡に捨てられました。だから今は空っぽの倉庫です。

でもここは頑丈です。ここの内部は、網の目に組まれた鉄骨を厚いコンクリートで固め、さらに銅板を張りめぐらせて空気が漏れないようにつくられています。また周囲は湿気を防ぐために空間を設けて二重の壁の構造になっているそうです。だから空っぽのここに来ると夏でもひんやりして気持ちいいです。

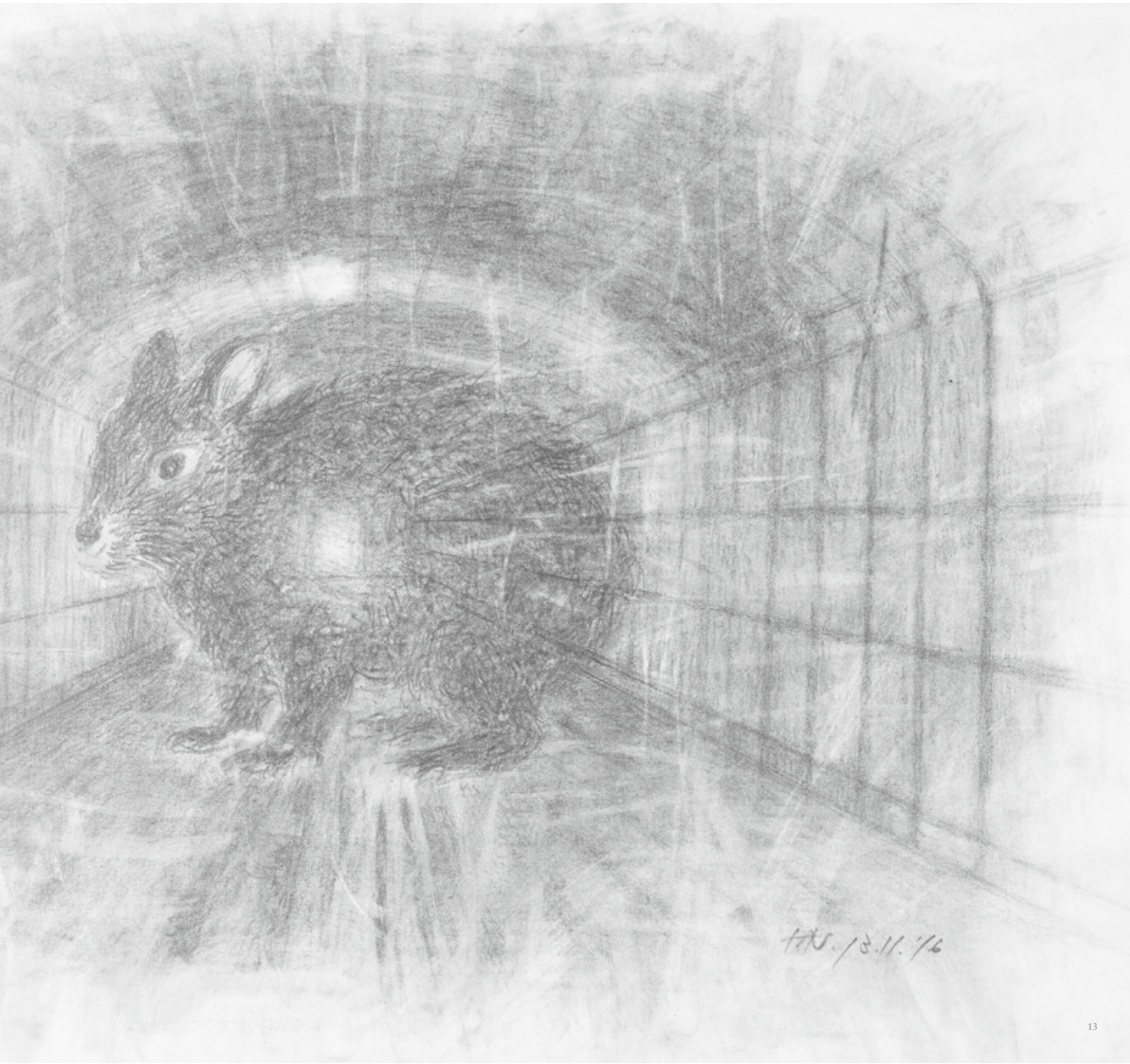
今は何の用途もなく、意味のない空間が私は大好きですが、人間は弾薬を保管したり、海に捨てたり、とてもおかしなことをします。ここから少し行ったところには、爆弾を積んで敵の船に体当たりする特攻艇の出撃基地もありました。こんな静かなところも昔は戦場の一部だったのです。

特攻と言えば、大島から見える喜界島（きかいじま）も日本軍の特攻基地で、知覧基地と沖縄を結ぶ中継の基地だったそうです。終戦の2日前に出撃していった19歳の特攻隊員もいたということです。なんともいたましい。

人間は私たち動物のように子孫を残すだけでなく、戦争という殺し合いをするから大変です。私は色が黒いから暗闇と仲良しですが、夜の山の暗闇はとても静かで平和です。人間の世界も恐ろしい闇に向かわないよう、アマミノクロウサギ一同心から願っています。

H.N.

図は奄美市瀬戸内町の旧陸軍手安弾薬庫とアマミノクロウサギの写真から



私は太平洋戦争が始まった次の年に旧満州国で生まれ、終戦のときは3歳だった。

ロシア兵が銃を持って土足で家に上がりこみ金目の物を強奪されたこと、幌付きの貨車と貨物船の船底で引き揚げてきたことなど、子ども心に微かな記憶が残っている。

父が満州電電に勤めていて終戦後は現地の人に技術移転のため、引き揚げたのは翌年の10月。私は4歳で、幸いに両親と子どもは私一人だったので中国残留孤児にならずに命からがら帰国できた。

引き揚げが遅かったので父の就職先が無く、故郷の奄美は米国の統治下にあり渡航できなかった。止む無く鹿児島市で父が農家から葉煙草を買ってきて作った煙草を母が私を連れて繁華街に行って密売などしていた。

小学一年生のとき、一家は大隅半島の山間地の開拓団に入植した。そこでの生活といえば、家の屋根も壁も床も竹と笹で作った家畜小屋のような粗末なものであった。電気、水道も無く雨露を凌ぐのがやっとのありさまだった。学校は分校で生徒数20余名の複々式の二学級で、先生は二名という状況だった。結局先が見えず小学校四年生のときに私たちは密航船で奄美に帰ったが、父の仕事が無く親戚を頼って沖縄に渡った。

そこでやっと父は元の技術を活かせる琉球電電に就職できた。昭和28年に奄美大島が日本復帰したときに当時の電電公社に転勤で帰郷できた。

我が家には少々の田圃と畑があったので、子どもも労働力として学校が休みの日はほとんど農作業に駆り出された。終戦後の食料事情は悪く、田畑の無い奄美の人は蘇鉄（そてつ）の実や幹から澱粉を取ってお粥にして飢えを凌いできた。

保 宜夫 たもつ よしお

1942年生まれ、元奄美市議会議員、奄美国際懇話会会長

図は本人提供の家族写真から

～50年後の奄美と私～

私が生まれたとき、奄美は
米国軍政の統治下にあり、
日本復帰はそれから
6年も経ってからのことである。

さらに13年を経て、50年前の私は憧れの東京行きの夢を叶え、東京から奄美を見る目を養うことができた。後に沖縄から奄美を見る機会も得た。
「奄美のポジションは、東京や沖縄に同化するのではなく、対極の雄をキープすることで輝く。」これが私の奄美論となった。

それでは50年後の奄美と私はどうなっているのだろう？

奄美の人口規模は、定住人口とUターン（二地域居住）人口、交流人口、ロボット人口の合計が横ばいでキープされ奄美人と移住者の人口構成は逆転する。
交通は、陸海空を自由に動くドローン車で移動するため、道路、港、空港は不要。反射板センサーで車間距離がコントロールされるため、接触事故はゼロ。燃料は海水と空気燃料で無料。
奄美民族は、英語、日本語のほかに、万葉語（奄美語）を駆使し、歌掛け文化と旧暦文化（世界無形文化遺産）、世界に類を見ない民族無血の復帰運動（世界記憶遺産）そして世界自然遺産を併せ持ち、多元力モデル民族と高く評価される。
さらに、ハブに関しては、奄美人の遺伝子に血が注入され、翻訳機でハブと語り合い、殺し合いが止まる。
さて、奄美のトラさんは？
胃袋改造で野草ブレンドおにぎり1日1個で生きられ、50年後も元気長寿。その後は魂が残り、ユタ神様によって霊媒されるから、永遠の存在となる。

花井 恒三 はない こうぞう

1947年生まれ、団塊世代がつくる無償ボランティア
図は花井氏の早稲田大学生当時のものと、
越間 誠 奄美写真集『奄美　二十世紀の記録』(2000年)
の"舟揚げ"の写真からのドローイングとの組み合わせ、
この"舟揚げ"の写真が撮られたのが1965年頃、
ちょうどこの時期に、花井さんは
東京に出て大学生となったことになる

僕が生まれたとき…
母は、何を思ったか30の年にそれまでのキャリアをすべて捨てて渡米。

大学に入り直した（その頃流行った「自分探し」というやつだきっと）。

僕が生まれた頃は大変だったらしい。博士過程最後の関門卒業論文試験と出産予定日がなんと一緒。延期するかどうかなどなど、母の担当教授と話し合った結果、「予定日は予定日、生まれたらそのときはそのとき」ということに。

そして母は、出産間近の大きなおなかを抱えて、2時間の口頭試験を受けた。無事？合格。母はその試験寸前までおなかの中にいる僕に向かって、「まだ出てこないでね～」と話しかけていたらしい。それを聞いていたのかどうか僕自身はまったく覚えていないが、予定より遅れてその3日後に僕は生まれた。1998年1月27日のこと。

母の卒業式の5月、僕はまだ4カ月。その卒業式には、僕の出産祝いも兼ねて、奄美のおじいちゃんとおばあちゃんもアメリカにやってきた。卒業式の舞台、紋付袴をきた祖父は、教授の代理という枠な計らいで、大勢の観客がいる前で卒業証明のガウンを母にかけた。おじいちゃんのそのときの嬉しそうな顔が忘れられないと、仏壇に飾られた笑顔の写真を見ながら「これだけは親孝行をしたかな」と母。余談だが、その祖父の顔には孫の中で僕が一番似ているらしい。う～ん。ちょっと複雑（なんせ母はそのおじいちゃんに子どもの頃そっくりだったらしいから）。そんな僕も大学生。そして母もまだアメリカで頑張っている。

徳 雅美 とく まさみ

1958年生まれ、奄美出身
カリフォルニア州立大学チコ校美術教育・
芸術鑑賞学教授、NPO法人理事長
図は1998年5月、
徳さん39歳、息子さん4カ月のときの写真から

息子さんは現在カリフォルニア大学
サンタクルーズ校一年在学

私が生まれたとき…奄美は南国の日差しを浴び、香りたつ潮風の吹き抜けるのどかな島であった。

1939年1月生まれの私が、おぼろげながら島の暮らしを意識しているのは、数年後からになる。

古くから島は貧しくものどかに自給自足で暮らしを立ててきた。奄美大島が一気に景観、環境の変貌、近代化へと進んだのは先の大戦８年後の米軍統治から解放された以降のこと。

島民所得を本土並みに引き上げるべく、国の特別措置法による施策が今日に引き継がれてきた。

島々の産業振興とともに道路や港湾、空港など社会基盤の整備充実が率先して進められてきた。島々の港は大型フェリーが毎日発着、５つの島にはそれぞれ空港が整備され、海、空ともに人と物流の大きな担い手となっている。

奄美大島の空港開設は1964年６月。いまジェット機の就航する現空港より南の陸域に整備された。その跡地は現在、奄美観光の拠点施設や田中一村記念美術館になっている。

奄美空港の開設は島の一大慶事とあって、開港式は島内外を挙げて盛大に祝賀の喜びに沸いた。この祝賀行事では本土の大手新聞社と、私が在籍する地元の新聞社が合同取材班を組み、私はカメラマンの一人として参加した。小型セスナ機「朝雲」を自由に指示して動かしていいとのことで、エプロンに駐機する各種旅客機、ターミナルビル屋上を埋め尽くした島民など、手に手に日の丸の小旗を打ち振り歓声を上げる人々の姿を低空飛行で撮った。これらは翌朝刊の一面を特集グラビアで飾った。

越間 誠 こしま まこと

1939年生まれ、報道カメラマン、図は越間 誠　奄美写真集『奄美　二十世紀の記録』（2000年）からの引用による

私が生まれたとき…私は南西諸島奄美大島大和村今里で生を受け、小学校三年一学期に父の転勤に伴い、宇検村久志小·中学校で子ども時代を過ごした。

森田 祉一 もりた こういち

1943 年生まれ
元中学校長、公民館生涯学習指導員
図は本人提供の 1960 年の写真から

久志部落は、土地が少ないので対岸の枝手久島に板付舟を漕いで毎日農作業に出かけるのが日課であった。

小学校の私も土日や放課後は海に出て、舟を漕いで魚釣りの毎日だった。したがって、櫂を使って舟をこぐことも自然に覚えた。

夏の間、特に夏休みは金つると言って、今で言う「Tバック」を朝昼夜つけて生活をしていた。私はTバックの先駆者と言ってもいい（金つるとは、ちんちんのところだけ三角形の布で隠し、腰はひもでくくるもの)。ひと夏で3、4回、身体の皮がむけ、それをはがしたり取らせたりするのが楽しみでもあった。

冬休みは、斧をもって、自分が引っ張っていける大きさの木を伐り、遠い道のりを引っ張っていく。山には、シイの実をはじめ、クガ（キウイの原種）やいろいろな山の幸があり、口が紫になるまで食べた。不思議とハブに出くわすこともなく…今は奄美で怖いのはハブだが…怖い思いはしなかった。

奄美群島日本復帰も小学校の頃で、三部落を二晩かけて提灯行列で祝福したのが忘れられない。

教員の子どもでも勉強はせず、自然を満喫し、楽しい小学校、中学校時代であり、今思い出すと実に若き幼少年時代、青春である。経済的には貧しくとも、心は楽しく、生き生きとして輝いた少年がそこにいた。

私が生まれたとき、父は38歳だった。

高梨 修 たかなし おさむ

1960年生まれ、奄美市立奄美博物館勤務
図は本人の母と子息の写真、
戦闘機「隼」、名越左源太「南島雑話」からの
引用図版の組み合わせによる

次男が生まれたとき、私は38歳だった。父も私も、38歳で二児の父親になっていた。38歳の私は、奄美大島で暮らしていた。

戦時中、立飛で陸軍の戦闘機「隼」の製造に従事していた父は、終戦のとき、23歳だった。

23歳の私は、大学で恩師に出会った。東京で生まれ育った私の人生が、南へ大きく舵を切った瞬間だった。その年、沖縄県出身の恩師に連れられて、初めて沖縄本島に行った。

自由時間に出かけた海水浴の帰路で、ウージ畑で農作業をしていた老婆に声をかけられ、彼女の家まで車で送っていった。別れ際、彼女は私たちに言った。

「私がにいさんたちの歳の頃は、戦争だった。毎日、鉄の雨が降っていた。平和が一番だよ。幸せしなさいね。」

彼女の「幸せしなさいね」という言葉は、東京に戻っても、耳から離れなかった。それから私は、沖縄の歴史を学ぶことに没頭した。大学で日本文学科に在籍していた私は、大学院で史学専攻に進学して、沖縄の歴史を学んだ。

もっと沖縄のことを知るためには、沖縄の北側にある島々も見ておかなければと思い、軽い気持ちで奄美大島をたずねた。29歳のときだった。ところが、勉強を重ねてきた沖縄の知識では、奄美はトレースできなかった。私は、奄美に夢中になり、将来の当てもないまま32歳で奄美大島に転住してしまった。母を一人残して（父は引越しする前に亡くなった)。

奄美に来て、25年目になった。奄美に転住して、初めて無意識に琉球王国の周辺として奄美を眺めていた自分に気がついた。

一人暮らしの母は88歳になり、米寿を迎えた。私の長男は、東京の大学に進学して、私の実家に暮らすことになった。私にとって、奄美と東京が繋がった不思議でうれしい予期せぬ瞬間だった。

私が生まれたとき、すぐ上の兄は…

私には兄が５人いる。やっと女の子が生まれたと聞いた兄は小躍りして「今夜はお祝いどー、お祝いどー」と、そこらじゅうにふれ回ったそうだ。

後に、親戚から聞くそのときの兄の様子が私の頭の中で膨れ上がり、見たことのある風景のように今でも描かれている。

生後３カ月で名瀬に引っ越すことになり、母親のテル（背負い籠）の中に入れられた私は、笠利の城間からふたつの峠を越えて名瀬まで来た。

乳を欲しがって泣くか、窮屈で泣くしかできなかっただろうテルの中の自分を思い描くことができる。

新川沿いの小さな借家に住み、父親は締め機（大島紬の工程のひとつ）、母親は機織りで生計を立てていたが、父親は５時になると締め機を降り、さっさと晩酌をはじめるのだった。母親の夜なべ仕事の紬織りで少し生活が安定し、兄妹で初めて高校に行かせてもらうことになった。集団就職で内地に働きに出ていた兄たちは、妹が高校に進学できることをとても喜んでくれた。

40年後、空の巣症候群と更年期が同時にやってきて、自分の「来し方」を深く見つめることになった。子どもの頃から木を植え、花を植えるのが好きだった自分に気づき、そうだ！山を買おう、私の夢は「背後に山、目の前海、そこで暮らす」ことだったではないか、そう思って行動すると、空の巣症候群も更年期もどこかへ吹っ飛んでいた。

そして、今、私は、芦徳に山を買い、小さな家を建て、毎日海を見ながら深呼吸をしている。

里井 つとよ さとい つとよ

1949年生まれ、オープンカフェ経営
図は1989年頃、新川沿い（安勝町）で
撮った写真を参照

私が生まれたとき、初めて私の瞳に映ったのはなんだろう。

松元 ひとみ まつもと ひとみ

1966年生まれ、会社役員
図は母に抱かれた本人と
当時の住まいを組み合わせたもの

私の幼い頃の話は、愛嬌があって健康体の姉とは対照的で、泣き虫で病弱で、夜中に山道を越え何度も病院に走ったということばかり。ときには、ハブを捕獲してお金に換え、それを病院の治療費に充てたこともあったとか。

そんな幼い私の記憶に焼き付いているのは、毎日朝から晩まで一生懸命仕事をする働き者の父と母の後ろ姿。祖母の背中におんぶされながらそれを眺めてきた。

祖母の鼻歌と、静かな波の音を聴きながら見た、東シナ海に沈む真っ赤な夕日も懐かしく思い出される。

写真に写る幼い私を抱く母は、若くとても美しい。あれから50年の年月が経ち、今、私の眼に映っているのは、認知症の父とすっかり年老いた母の姿である。この二人の出会いによって私は生まれ、二人の歴史の中で育ってきた。

ありがとう。

近頃、父の介護に追われ、働き詰めの母からは笑顔が消えている。何事にも一生懸命向き合い、手を抜くことを知らずに生きてきた母。年老いた身体はもう追いつかないはずなのに、まだ頑張ろうとしている。お願いだから手を抜いて、手を抜いて…。子どもはいくつになっても母親の笑顔が見たいものである。

私が生まれたとき、初めて私の瞳に映ったのは、間違いなく母の笑顔だったにちがいないから。

私が生まれたとき…（関連写真について）

あの写真の双子は、僕自身はよく分からなくて姉に確認したのですが、うちの母の兄の子どもで、僕にとっては従兄弟になる人たちです。

母の兄は長男、母は末っ子ということもあって、あの双子と従兄弟である僕とはかなり年齢が離れていることになります。しかも、あらためて気づかされたのですが、母は昔の人にしては結婚が遅かったと思います。うちの母が、双子の子どもたちの面倒をみていたと聞いています。東京の杉並で生まれ育ったそうですが、双子の一人は幼い頃に病気で亡くなったそうです。

戦後、母たちは奄美大島に戻ってきています。双子のうちの一人も奄美に来て、島で学校を出ています。その後、東京に出て会社務めをし、退職後、奄美で生活していましたが、数年前に亡くなりました。

母に当時のことを聞くことができたらいいのですが、今施設にいますので、昔のことを聞くこともできません。申しわけないですが、たいしたストーリーにはなりえません。

村田 秀樹 むらた ひでき

1955年生まれ、読売新聞奄美通信部記者
図は本人提供の写真から

私が生まれたとき、
昭和6年9月30日、
戦中、戦後育ちと言える。

笠利町喜瀬村（かさりちょうきせむら）、普通の農村でした。稲作、サトウキビ作り、いも作り、男は農業、女は紬織りと豚の飼育で平和な暮らしのとき、昭和16年、太平洋戦争勃発。

生活物資は不足し、空襲の合間を見て田畑に出ることになり、特に18年、19年、20年は苦しい生活であった。

昭和20年3月、中学校の入学試験中に空襲警報が発令され、全員防空壕に入るという騒ぎになった。

終戦後はアメリカ政府下におかれ、日本本土と分離され不便な生活に入った。

昭和21年、南海日日新聞社の新民謡、作詞、作曲募集で多くの作品が寄せられ、また作詞、作曲から歌唱までできるスーパーマンが現れ、いきなり新民謡ブームとなった。それと呼応して劇団が誕生して演劇が盛んになり、このことを奄美ルネッサンス、また赤土文化と呼ぶようになった。

その、自分たちの楽しみは自分たちで、という機運がそのまま日本復帰運動につながり、99.8％の署名となり、昭和28（1953）年12月25日、遂に日本復帰を果たしたのである。

人生の最も血気盛んな青春時代に戦争という不運に遭遇したことは、実に不幸なことであった。

山田 薫 やまだ かおる

1931年生まれ、
元競輪チャンピオン、元小学校長、
現在島口漫談で活躍

私が生まれたとき、二人の祖父は健在だった。

でも私が物心ついたときには、二人の祖父は他界していた。一緒に撮った写真もないので、私には祖父との思い出や記憶がない。

私はよく父似だと言われる。生まれたときから父似だと言われ育ってきた。そして、小さいときから絵を描くことが好きで、父方の叔父叔母従兄弟達も絵を描くのが上手かった。それは、私にとって父方の血が流れていると感じられることだった。

私は38歳の頃に10代から憧れていた陶芸とバイオリンを習い始めた。今までできなかったこのふたつの事がある日突然、できる環境が目の前に同時期に現れて始めることができた。

偶然なのか運命だったのか時が経って、長年憧れていたことができて嬉しく思っていたら、母から実は陶芸もバイオリンも祖父の趣味だったと聞かされた。そのときにようやく母方の血が流れていることを感じられた。幼いときから父方の方にばかり似ていると言われ続け、母方との繋がりを見出せなかったからか、とても嬉しかった。

二人の祖父との写真や思い出がなくても、好きなことを通して祖父と私が繋がっていることで、私は二人の孫だと確信できた。

泉 十月 いずみ かんな

1972年生まれ
図は1977年、泉さん5歳のときの写真から

わたしが生まれたときからずっとある
この海の向こう側にある世界を中学生の頃の私は知らなかった。

不安や恐怖をまったく感じず
ただ、目の前のもっともっと先にある景色を見たいと思った。

あのときはなぜ、不安や恐怖を感じなかったのか、今ならなんとなく分かる。
ここが私の帰ってくる場所だと分かっていたからだ。
もし苦しいことがあっても、私はここに帰ってくればいいと思っていたからだ。

それから3年、高校三年生の私は、海の向こう側の世界を知っている。
しかし、海の向こう側にはまだ先があった。
私は、またその先が知りたくなった。
次は逃げ道はない。
それでも私は知りたいと思う。

さあ、次はどんな世界が広がっているのだろうか。

上堀内 美咲 かみほりうち みさき

1998年生まれ、日本女子大学一年生
図はハングライダーランチャーでの写真から

わたしが生まれたとき、
この島にはたくさんのヤギがいて、

海岸線の崖の上にはいつも5、6頭の、ときには10頭以上ヤギの群れが闊歩し、跳ね回りながら草を食んでいた。

わたしが生まれてから3、4年あと、保育園に小さな子ヤギがやってきて、砂場の隣の小さな小屋につながれた。桑の葉と枝が特に好きだったが、小さな子ヤギはいつでも柔らかい葉っぱを探していて、口に入るものは何だって食べた。

わたしが生まれてから3、4年と少し経った朝、わたしは初めて泣いている大人を見た。そのときわたしは初めて、ピンク色の花をつける小屋の隣の夾竹桃の、強い毒を知った。

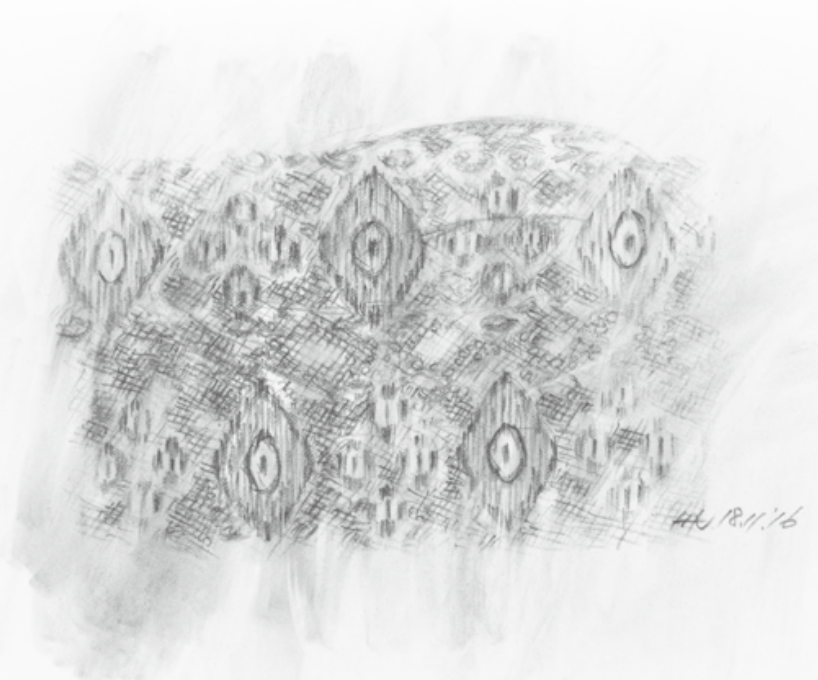
わたしが生まれてから18年あと、この島の2,300頭ものヤギの食欲は海岸線の彼らの住処を壊しはじめ、わたしたちはたくさんのヤギを捕まえ、殺した。

わたしが生まれてから25年あと、この島にいたたくさんのヤギはすっかりいなくなり、赤土の海岸線は緑色の元の姿を取り戻した。

生まれてから26年経ったわたしは、この島の人びとが言う「美しい海、豊かな森、多様な生物」の言葉を聞くたびに、海岸線の崖の上にいる、記憶の中の小さな白い影を探している。

榊原 希望 さかきばら のぞみ

1990年生まれ、
南海日日新聞社記者
図は本人提供の写真から



私が生まれたとき、ハブと人間界では、
熾烈な戦いが繰りひろげられていた。

ハブは自分に害を加える人間を噛み殺そうとするが、何もしない人間には害を加えないと聞いた。戦時中、ハブを食べて命を延ばした人も知っている。

私は、昭和30年に奄美大島のマチで生まれ育ち、ハブに遭遇することなく40年余が過ぎ、その後、訳あってハブがウジャウジャ生息するというムラに転居した。そこでも、あるオバサンが何度も噛まれたがピンピンしているとか、少年が大きなハブを素手で倒したという武勇伝を聞くばかり。

当時ハブは、役場が、5千円以上で買い上げるという貴重な収入源で、とてもアリガタイ生物へと変身していた。

人間より動物たちのほうが、ワガモノ顔で築百年の借家に住んでいた。そんなある晩のことである。

ゴミ出しに外に出て、数歩で足が止まった。月明かりの中、草むらからスルリとハブが出て立ちはだかったのだ。生まれて初めてご対面した瞬間である。凛と立っている姿は少し痩せていて、まっすぐに見ている瞳はとても慈愛に充ちているように感じられた。私の心は、とても穏やかで幸福だった。

人間界で、かなり無理をしていた私に、自分らしく生きることを教えてもらったと、あのときのハブに感謝している。

芳岡 一乃枝 よしおか かずのえ

1955年生まれ
図は大島紬とハブをイメージしたもの
— 江戸の大島紬の図案師が、
月下のなか、金ハブが蘇鉄の葉の上を這う姿に
その着想のヒントを得たという話から

私が生まれたとき、
それはある人の生まれ変わりだったと聞きます。

いつの時代でしょうか。奄美の島へも足を運ぶことのできた、身分の高い人だったようです。

しかし、時代は戦乱の世を迎えていました。いつ外界から敵がやってくるか分かりません。一族共々滅ぼされるという恐ろしく悲惨な時代のうねりへと突き動かされたのでした。人々は、平和で豊かな暮らしを切望しました。

どれくらいの年月が流れたのでしょうか。ある年の旧盆も明けた昼下がり、北大島の旧笠利町の辺留（べる）グスクというお墓に出かけたときのことです。車を降りた夫は、暑さをしのぐためビロウで編んだクバ笠をかぶり、首にはタオルを巻いて足早に草むらにわけ入りました。

夏まつり真っ盛りのこの時期には、港周辺で花火を鑑賞できるように、またハブ除けに雑草の草刈りをします。そして旧暦七夕には先祖をお迎えするために、お墓を掃除したり、先祖が七夕飾りをつたって家に降りてくるという言い伝えなどもあって、他所の家より目立つようにと大人でも七夕飾りに夢中になるのです。

それでもハブに気をつけるため、私はうつむき、タオルで顔を覆いながら後を追いかけました。夫はふり向こうともせず、私のずっと先をただ黙々と歩き続けていた、ちょうどそのときです。

彼がふり返りました。そして私の方へ戻って近づいてきたのです。かぶっていたクバ笠は妙に色鮮やかで、刺繍か染め織りが入っていたように見えました。顔はクバ笠の影に隠れてうす暗く、輪郭がどうもはっきりしないのです。躰もぼんやりと、何か蓑（みの）か鎧のようなふっくらしたものをまとったその者は、私の横をすーっと通り過ぎて行ったのです。見知らぬ男性でした。ふり返ると、夫は私の後ろから暑そうにしながらやって来たではありませんか。一瞬の出来事でした。

なんでもその墓の一帯は、むかし琉球の役人が島を治める際に滞在していたといわれる場所だそうです。いま私たちが奄美で暮らしているのは、この島でやるべき使命に導かれているからなのかもしれません。

町 ゆかり（まち ゆかり）
奄美市名瀬公民館四谷分館勤務
図は本人提供の家族写真と想像との組み合わせ

私が生まれたとき、
既に「誰か」の意識に作用されている。

「何故、私は今このようなことに携わっているんだろうか？」
常に勝手な義務感に駆られるばかり。

これまで音楽やメディアを通して、島興しに関わり、挫折や諦めを幾度も味わってきた。この島ではあまり事例のないことばかりで、なかなか周りに相談できず、人に囲まれていても孤独感に苛まれる日々。

その度、後ろからそっと「誰か」に押され、いつも前へ歩むことができた。その「誰か」を確かめたくなった。何故、私はここに存在するのだろう？

それから私は、古い書物を調べたり、親戚を訪ね家系図を調べるようになった。さほど時間もかからず、私の姓「麓」を名のり始めた初代まで辿ることができた。

ある日、かつてのこの街に詳しいある方から、「君の仕事場は、自分の所有する土地かな？」と尋ねられた。
「いや、家主さんがいて家賃納めてますけど。笑」
「どうやら、戦前そこは『麓旅館』というところだったらしいよ！」
「へぇー！そうなんですね！」と戦前の地図の写しを頂いた。

それからまもなく、商店街の通りで、ある知人と出会い、こう尋ねられた。
「私の大学のときの仲間が青森にいるんだが、自宅の仏壇に麓姓の位牌があって、本人はよく経緯が分からないんだが、どうやら奄美から辿りついているらしいんだ。君はそういうこと調べられないかね？」

「実は今そういう家系図などを調べているところですよ！位牌に書いてあるお名前とか分かれば…。」
「そうなんだ！じゃあ、その知人に知らせておくね！」

それから数日後、唐突にもその方から位牌が届けられた。

その日、残業を終え大分時間も遅くなったころ、位牌のことを思いだしその中を覗いてみた。

「麓 義則」と書いてある。

机の引き出しから家系図を取り出し調べてみた。
「麓 義則、麓 義則…あっ、あった！」
初代の三男の家系の流れであることが分かった。どうやらその後、子孫は居ないらしい…。

戸惑いながら、頂いた戦前の古地図をとりだし見てみた。
「んっ！？」
なんとそこには、「麓 義則旅館」と書いてある。

「この位牌は…ここに戻ってきたんだ！」
とてつもない縁を感じ、鳥肌がたった。

自分もここに呼ばれたのだろうか？その後、更に不思議なことが度重なっていく…。

この世に生まれた私以外の「誰か」の意識によって、私の人生は作用されている。

麓 憲吾 ふもと けんご

1971年生まれ、あまみエフエム代表
図は麓氏（中学時代と現在）と
奄美FM局の建物の写真から

私が生まれたとき、
アメリカのロケットが人を月まで運びました。

父は私に「宇宙太（うちゅうた）」と名付けたかったようです。今なら「ロマンがあっていいわね」なんて言われそうですが、昭和まっ盛りの頃では将来いじめられっ子の烙印を押されるのは必至です。小学生だった姉が強硬に反対してくれました。姉に感謝しています。

姉の提案は「ワタル」でした。当時リカちゃん人形のボーイフレンドで「ワタル君」という人形が流行っていました。リカちゃんさえ買ってもらえなかった姉はワタル君を熱望していたのです。

そういえば私が小学生の頃、クラスに「わたる」という名の青白い顔の、ひょろっとした、運動の苦手な子がいました。彼は小さい頃お姉さんに散々お人形さん扱いされて、そのせいでいつも元気が無いのだと私は思っていました。

私といえば毎日暗くなるまで外で駆けずり回って遊ぶような子どもでした。もう一人の姉が宇宙太もワタルも認めなかったのです。もう一人の姉にも感謝する次第です。まだ保育園に通っていたこの姉はテレビ漫画の「オバケのQ太郎」が大好きでした。それで「おばきゅう」にしろと頑として譲りません。ロマンチックないじめられっ子からお人形さんを経て、ついには生まれた直後にお化けにされそうでした。

以上は、私が中学生の頃に母親から聞いた話です。最終的には普通の日本人らしく名付けられ、今まで無事に生き延びています。いつの時代も母親は偉大です。

望月 信吾（もちづき しんご）

1969年生まれ、笠利、宇宿貝塚史跡公園勤務

図のもとになった写真は泰山氏提供による1970年頃に撮られたもの

私が生まれたとき…

それは私自身が私を意識したときだろうか。そのときが思い出せない。どこからかふわふわ飛んできて、長い間奄美の湿った土の中で眠っていたような気がする。木々を通り抜ける光が少しずつ周りを温め、ゆらりゆらりと過ぎる時間。遠くに聞こえる音が私の中に入り込み意識というものを持たせ始めた気がする。

綾を織り込むひずきの音、太鼓と三味線の調べ。合わせるように聞こえるのは深く悲しみを隠して唄われる島唄。私の中に響く子守唄は時間が止まったように思えたが、地上では長い歴史が重ねられていたようだ。

ある日、私は目を開け、頭をもたげて思い切り大地の中から顔を出した。きっとそれが私がこの世に生を受けた瞬間だったのだろう。悠久の歴史を育みながら、変わることなく繰り返された一コマに私は今、ヒカゲヘゴの名前を持ち参加したのだ。深い森の中で静かに繰り返される、自然の営みの優しい時間にやってくる風や鳥たちの話に耳を傾けながら、私は世界を知ってゆく。地球47億年の時間の中で、何度か地面が割れ、雷がとどろき山々が形を変えたとしても私たちは生き延びてきたことも私は知る。

あらゆる事象を黙って抱くように受け止める母なる地球は、次は誰を起こしてくれるのか。そんなことを考えるとワクワクしてくる。湿った土に身を委ね、今に生まれた奇跡を噛みしめながら見上げた上には木漏れ日がきらめき、隙間から青い空が見える。目を細めていると、鳥たちがやってきて話しかけてきた。「そのずっと上に、この地球の故郷、宇宙があるよ」と。

宮 京子 みや きょうこ

1957年生まれ、自営業

図はおがみ山公園のヒカゲヘゴの写真から

私が生まれたとき、　それは奄美群島が日本に復帰する２年と少し前

一度だけで終わったが、思い出すと恐ろしい出来事がある。
私たちは、小学校の校庭に風呂敷を持って集まった。まん延したシラミ撲滅のためという理由であったが、ＤＤＴという今でこそ危険性が周知されている劇薬の粉を、児童全員の頭に散布した。やりませんという選択肢はなかった。
そんな時代だった。

食糧事情といえば、1952年、全国の小学校でパンとおかずの完全給食が始まり、私の通った小学校では、昼近くになると給食室からメリケン粉でパンを焼く芳ばしい香りとユニセフのミルクを炊く甘い匂いが漂ってきた。今思えば、奄美群島の食の欧米化は、米軍占領統治から始まった…。大げさかもしれないが、アマミッチュ（奄美人）の身体は、それ以降、弱くなっていったような気がしてならない。

シマ（集落）で聞くのは、米粒が数えられるほどしか入っていないソテツ粥を食べたという、私たちより少し上の先輩方の話だ。食糧難であったかもしれないけれど、それでも、私たち以前の世代に長寿の方が多いのは、自然の産物を食生活に取り入れてきたからに違いない。白米だけのご飯を誰もが腹いっぱい食べられるようになったのは戦後の高度経済成長期以降のこと。だが、今、米は必需品というよりも、すでに嗜好品的な要素が強くなりつつある。

奄美の食文化には、島の人々の食生活の歴史が作用していて、味覚それ自体が歴史的産物であると思える。どんなに欧米化が進んでも残さなければならない文化がある。奄美の食の未来のために。
何百年後の、子どもの笑顔あふれる奄美群島を夢見つつ。

泉 和子 いずみ かずこ

1951年生まれ、奄美郷土料理研究家
図は本人提供の、1958年頃、姉妹との写真から
もうひとつの図も本人提供のソテツ粥再現写真による

＋追記＋

「ソテツ粥とは何か」という質問に応えて…「米粒が数えられるほどしか入っていないソテツ粥」ですが、ソテツ粥は、ソテツの芯の澱粉で作る粥、「シンガイ」とソテツの実（ナリ）の澱粉で作る粥、「ナリガイ」があります。米粒が入らないのは、「ドガキ」と呼んだそうです。

ソテツの芯の澱粉を保存してあったので、米粒を少し入れ、再現してみました。

—— 泉 和子

私が生まれたとき…
今から50年ほど前まで、私の集落にはノロ神様がいました。

神人は小村安グリ（故人）で、皆「グリおば」と呼んでいました。今は、神屋敷跡だけが残っています。

当時は集落の行事、八月踊り、種下ろし、相撲のときは、必ずここを踊り始めにし、また相撲の中入りの出始めもここからだったと言います。

社会の変化とともに、途絶えた行事もありますが、かたちは変わりつつも今も続いている行事もあります。なかでも、一番思い出す懐かしい行事に「ナミチミシャク」があります。旧暦の9月19日に行われていました。

前日に各家々から一合ずつお米を届けると、神屋敷で神役の方々が「おミキ」を作り、集落の中程にある「ナミチ」という大きな枝の伸びたガジュマルの木のある広場でそれが各家に配られました。集落の無事息災と豊作の祈願だと聞いています。昭和41年まで行われていました。今では年中飲めるミキですが、味と思いがどこか違います。

町内でも小さな集落で、今から140年前の明治10年、島で丸田南里（まるたなんり）を中心とした黒砂糖自由販売陳情運動があったこと、西郷隆盛率いる西南の役があった歴史は、教科書で教わったのですが、今は亡き友人から借りた一冊の本から、同じ頃、西郷を頼って上鹿した陳情の志士55名のうち西南の役へ強制従軍させられた人々がいたこと、32名が帰らぬ人となったこと（6名戦死、26名は帰島の折りに海難死）は驚きでした。また陳情団の人々の中の龍郷方円村（たつごうえんむら）、円友二志（えんともにし）の名に感激しました。

私の集落から、命がけでシマのために頑張られた人がおられたことに、心打たれ、今でも胸が熱くなります。昨年の1月には区長さんの計らいで神屋敷跡の草刈り作業があり、老若男女多くの方が汗を流しました。

やはり神屋敷は、今も昔も集落の守りの中心なのかなあと思っています。

元治 富子（もとじ とみこ）

1951年生まれ　青果店経営
図は本人提供の昭和41年の家族写真から
本人は中央セーラー服姿、両脇の父母は故人となった

私が生まれたときよりももっと昔…

私は珊瑚のかけらです。ウミの世界に生き、死んで、笠利の海岸に打ち上げられました。ヒトで言えば骨のようなものです。

私が生まれたときよりももっと昔、この海岸を上がったオカの地区には高貴なお方の屋敷があったそうです。そこから発掘された遺骨の顔の近くにはガラス玉が出てきました。中国では、地中に長くいた蝉が、やがて空中に飛び立つことから「含蝉（がんせん）」といって、死者の口に玉製の蝉を含ませて埋葬する習慣があったそうですが、ここで発掘されたガラス玉もそういう意味を持っていたと聞きます。埋葬された死者の魂は蝉のように地中から出て天国に行ったのでしょう。

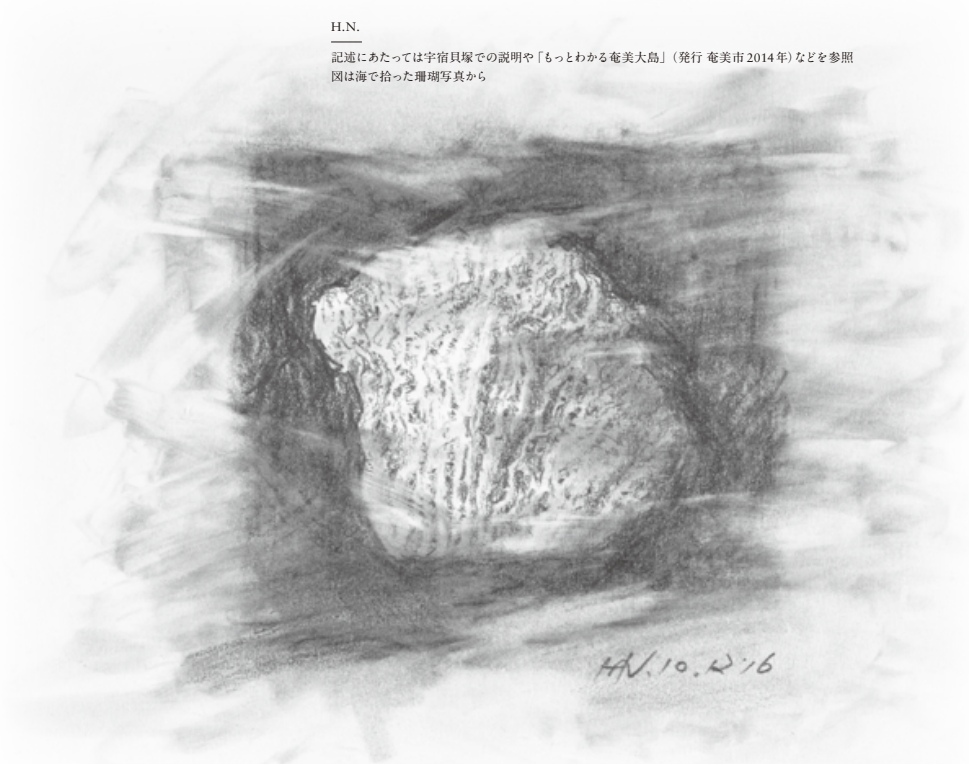
また別の発掘では、20歳ぐらいの高貴なお方の埋葬骨とその足の間に埋められた赤ちゃんの骨も見つかりましたが、そこは大きな石が骨を押えるようにおいてあったそうです。これはどういう意味なのでしょうか？

おそらく死産で、赤ちゃんとお母さんがともに死んでしまったので、未だ生を受けていない赤ちゃんが、たたりとして出ないように石で封じたようです。
一方では空に解き放ち、他方では封じる、おもしろいですね、ヒトの発想は。

私たち生物の世界とは違って、ヒトの世界では想いがかたちをつくるのですね。ヒトは幻想（想い）がないと生きられないそうです。

H.N.

記述にあたっては宇宿貝塚での説明や「もっとわかる奄美大島」（発行 奄美市2014年）などを参照
図は海で拾った珊瑚写真から



ドローイング

長沢 秀之

文

泉 和子、泉 十月、上堀内 ちあき、上堀内 美咲、越間 誠、榊原 希望、里井 つとよ、高梨 修、保 宜夫、
徳 雅美、花井 恒三、麓 憲吾、町 ゆかり、松野 恵子、松野 伊吹、松野 和未、松元 ひとみ、宮 京子、
村田 秀樹、望月 信吾、元治 富子、森田 紘一、山田 薫、芳岡 一乃枝、H.N.

あとがき

徳雅美さんとの出会いがなかったらこの企画は始まらなかった。奄美出身の彼女の話や「シュノーケルをやるなら絶対に来るべき！」というすすめについ魅かれ、下見も兼ねて2015年の冬に初めて奄美を訪れた。このとき2日をかけて島の各地を案内してくれた人が徳さん紹介の森田紘一さんだった。企画を思い立ったのもこのときである。次に行ったのが、2016年の夏。このときは大学のムサビる！の指導と引率も兼ねて10日余の滞在だったが、森田さん紹介の、花井さん、保さん、麓さん、町さん、高梨さんらと会い、話をすることができた。またこのとき、上堀内さんが私と学生たちを案内してくれ、松元さんや里井さんを紹介してくれた。

花井恒三さんからは越間さん、泉さん、山田さんを紹介された。越間誠さんは奄美写真集「奄美　二十世紀の記録」で知られる報道カメラマンで、スタジオを何回か訪れるなかで写真集からの引用を承諾してもらい、文章もいただいた。泉和子さんからは古い貴重な写真といくつかの郷土料理の写真の提供を受けたが、紙面の都合でそれをすべて載せることができなかったのが残念である。村田さん、榊原さん、元治さん、望月さんはその後シマを訪れるなかで知り合った人である。

編集作業で重要な細かいやり取りは、上堀内ちあきさんと町ゆかりさんを通して行った。上堀内さん紹介の松野さんの家族、上堀内美咲さんが新たに参加し、町さん紹介の宮さん、芳岡さん、泉十月さんらが文章と写真を寄せてくれた。何回ものメールのやり取りとこちらの要望に応えてくれたお二方には感謝の気持ちでいっぱいである。

ドローイングのいくつかは私が文章を書き、H.N.記とした。展示に先立っての冊子の刊行となったが、それは奄美の皆さんにこの全貌を見てもらい、協力のお礼としたかったからである。
（肩書きについては個人企業や団体、商店の場合はその固有名を省略し、公の機関の場合はそのままの名称を用いた。）

—— 2017年3月　長沢秀之

対話

展覧会「未来の幽霊－長沢秀之展－」より
対話「私が生まれたとき」奄美編

開催期間

2017年9月4日～10月1日

主催

武蔵野美術大学 美術館・図書館

会場

武蔵野美術大学 美術館・図書館
展示室2

協力

武蔵野美術大学 油絵学科研究室

小冊子
対話「私が生まれたとき」奄美編

監修・執筆・ドローイング

長沢 秀之

執筆

泉 和子
泉 十月
上堀内 ちあき
上堀内 美咲
越間 誠
榊原 希望
里井 つとよ
高梨 修
保 宜夫
徳 雅美
花井 恒三
麓 憲吾
町 ゆかり
松野 恵子
松野 伊吹
松野 和未
松元 ひとみ
宮 京子
村田 秀樹
望月 信吾
元治 富子
森田 紘一
山田 薫
芳岡 一乃枝　　（五十音順）

編集

内田 麻美子
（武蔵野美術大学 美術館・図書館）

装丁・デザイン

大橋 麻耶

印刷

株式会社山田写真製版所

発行

武蔵野美術大学 美術館・図書館
〒187-8505
東京都小平市小川町1-736
042-342-6003
http://mauml.musabi.ac.jp/

発行日

2017年6月16日

本書の一部もしくは全てを複写複製することを禁じます。
©Musashino Art University Museum & Library